日本活断層学会シンポジウム「2011 年東北地方太平洋沖地震に伴う内陸活断層の挙動と地震活動・地殻変動」および 2011 年度秋季学術大会報告

日本活断層学会 2011 年度秋季学術大会実行委員会

1. シンポジウム「2011 年東北地方太平洋沖地震に伴う内陸活断層の挙動と地震活動・地殻変動」

11 月 25 日(金)の午後 1 時 30 分より，千葉大学けやき会館大ホールにおいて，標記シンポジウムが一般公開で開催された。3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震，そして大震災，原発事故，活発な余震活動が後押しし，非会員 46 名を含む 119 名の参加があった。新聞社を始めとするマスコミ，自治体関係者，一般の方が含まれていたことから，本シンポジウムへの関心の高さが窺われた。本学会に設置された「東北地方太平洋沖地震に関連した地震活動・地表地震断層の評価に関する検討専門委員会」の委員長である吾妻　崇会員が司会を務めた。

冒頭，オーガナイザー（宮内・杉山・吾妻）を代表して，秋季学術大会実行委員長でもある宮内崇裕会員が本シンポジウムの趣旨と予定される討論内容の説明を行った。続いて，6 人の話題提供者がそれぞれ 30 分の講演を行った。まず，4 月 11 日に発生した正断層型の福島県浜通りの地震(M7.0)と地表地震断層に関連して，活動履歴・活動センスの観点から堤　浩之会員が，変位量とスケール則の視点から粟田泰夫会員が，応力場変化の観点から今西和俊氏（産総研，招待講演者）が講演を行った。休憩を挟み，3 月 12 日に発生した長野県・新潟県県境の地震(M6.7)に伴う地変と被災状況について，松多信尚会員が現地調査に基づく紹介を行った。続いて，本震による広範な応力変化が余震活動や内陸活断層へ与えた影響について，遠田晋次会員がクーロン応力変化に基づいて具体的な場所・断層名を挙げて解説した。最後に，今給黎哲郎氏（国土地理院，招待講演者）が宇宙測地学的観測データに基づく地表変動を紹介し，地震時変動・余効変動との関係を述べた。

全講演の終了後，講演者全員と宮内・吾妻両オーガナイザーが登壇し，吾妻会員の司会で総合討論に入った。「巨大地震サイクルにおける内陸の地殻変動・地震活動」を討論の主たるテーマに設定し，活断層を動かす素因（起震力）・誘因（トリガー）は何か？という本質的な問題へと展開した。特に，正断層運動を続けてきた福島県浜通り付近の地震を起こした活断層（塩ノ平断層・湯ノ岳断層）の挙動と引張場継続の不思議，引張場と矛盾するような阿武隈高地（海成段丘）の隆起の問題などが提起された。会場からも，地質学的にみて短縮場にある地域に正断層が共存する理屈があるのか？と質問があった。さらに，応力場の変化によってその活動に正・負の影響がでる内陸活断層の幾つかの例を基に，その確からしさや断層近傍の地震活動の活発化がトリガーになる可能性について議論が及んだ。続いて，現在進行中の余効変動と深部すべりとの関係を議論し，深部すべりが地震性へ発展する可能性を否定できないことから，今後の余効変動の行方が重要であることを確認した。議論が白熱したところで予定時間を過ぎてしまい，司会の吾妻会員が今後の課題をまとめて，午後 5 時 55 分にシンポジウムを終了した。近代的な地震観測が始まって 100 年余，未曾有の M9 巨大地震を経験し，いま起こりつつある関連事象は初めてのこと

ばかりであるが，逆にこれから起こることがこれまで未解明であった問題（地形・地質・地震学間に跨る）を解くヒント・鍵になることは疑いない。これを肝に銘じて，今後の活断層研究を推進することが重要であると改めて感じた。

シンポジウム会場の様子

シンポジウムでの講演

総合討論の様子

2．懇親会

シンポジウム終了後，午後 6 時 10 分から，けやき会館内レストラン「コルザ」において懇親会が催された。参加者は，学生会員 3 名・アルバイト学生 7 名を含む 59 名であった。大会実行委員長である宮内会員の開会の挨拶に続いて，開催校・千葉大学の大橋一世理学研究科長より御挨拶を戴いた。島崎邦彦会長の挨拶後，大橋研究科長に乾杯の御発声を戴いた。開宴後，すぐにいたるところで話の輪ができていた。宴が盛り上がった頃を見計らって，フォトコンテンストに関する講評を審査委員長の白尾元理氏より頂戴し，優秀賞の黒澤英樹氏に代わって，市川八州夫会員が撮影にまつわるエピソードなどを紹介した。最後に，2012 年度開催校である京都大学の堤　浩之会員より，大会の日程や場所について紹介があり，午後 8 時にお開きとなった。

懇親会の様子

白尾元理氏によるフォトコンテストの講評

3. 2011 年度秋季学術大会・授賞式・記念講演・若手優秀講演賞表彰

翌 11 月 26 日(土)の午前 10 時から午後 5 時過ぎまで，けやき会館大ホールにおいて標記の各プログラムが実施された。参加者は 127 名(3 名は学生会員，10 名ほどは非会員)であった。

学術大会では口頭 10 件，ポスター13 件の発表が予定通り行われた。口頭発表では，残念がなら質問が少なく，座長からの質問で終始するケースがあった。ポスターの前では若手会員を古参研究者が取り囲み，白熱した議論が見うけられ，コアタイムが1時間では短いように感じられた。

午前中の口頭発表終了後，学会賞と論文賞の授賞式が行われ，学会賞は野島断層の保存と啓蒙活動に大きく貢献された淡路市に贈られた。また，論文賞は，鈴木康弘・杉戸信彦・隈元　崇・澤　祥・渡辺満久・松多信尚・廣内大助・谷口　薫・田力正好・石黒聡士・佐藤善輝の 11 氏による糸静線北部の地震発生予測に関する共著論文に贈られた。引き続き，今回が 2 回目となる「日本の活断層・フォトコンテスト」の審査結果(優秀賞 1 点，入賞 6 点)が紹介され，本大会に参加した受賞者 5 人が表彰された。

昼食休憩後，学会賞の対象となった野島断層の保存・啓蒙活動について岡田篤正会員が紹介し，続いて鈴木康弘会員が論文賞の対象となった研究の経緯や内容を紹介した。

午後 3 時から再会した口頭発表の終了後，「若手優秀講演賞」が発表された。今年度の同賞は，房総半島南部の離水海岸地形についてポスター発表を行った遠藤香織会員と，スマトラ断層沿いの変動地形解析についてポスター発表を行った副田宜男会員に贈られた。

シンポジウムから学術大会まで，広めの会場の大ホールを参加者がほぼ埋めて，熱心に発表に聞き入る様子が印象的であったが，学術大会における口頭発表では，参加者と講演者の間でもう少し活発な質疑・応答が期待されるところであった。今後の学会運営のみならず，全会員の課題として指摘しておきたい。

最後になりましたが，事前・事中・事後にわたり，2011 年度大会の設営・運営に御尽力下さった学会事務局やアルバイトの諸氏をはじめ，関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

学会会場（千葉大学けやき会館）

千葉大生による受付の準備

淡路市への学会賞の授与

論文賞の授与

学術大会での発表の様子

若手優秀講演賞の授与